

「小空間制作体験による児童の心理的効果に関する研究」

論文要旨

都市更新の著しい現在、日本の児童の遊び環境は大きく変化している。テレビやテレビゲームの出現により、遊ぶ仲間や空間を求めなくても、遊ぶ事が可能となり、集団で外遊びをする児童が減少している。また、都市化によるライフスタイルの変化により、生活領域において、他者との関わりの希薄化と児童の生活の多忙さ（習い事など）や安全面への配慮の強化に伴い、児童の遊べる時間や空間の確保も一層難しくなった。一方、児童期における遊びの経験には、様々な場面で児童同士のやりとりにより社会的スキルの使用が含まれるとされ、「遊び」の重要性が指摘されている現状がある。児童の遊びは、様々にあるが、その中でも「秘密基地」「隠れ家」など、児童達自身により独自に意味付けられた「児童だけの小空間」での遊びは、児童だけの社会が構築され、児童の情緒面を刺激する場に成り得る可能性が挙げられている。

また、小学校教育においても、「図工作・造形遊び」の授業では、思考・判断・表現する基礎的な能力と生活や社会と主体的に関わる態度を生み、実社会での「生きる力」を育む事が期待され、重要視されている分野である。造形遊びには、協同造形活動の中で「遊び性」「コミュニケーション性」「目標到達性」の三要素が相互作用し、心理的効果があると評価されている。しかしながら、造形遊びのみならず、児童の遊びと空間的な心理効果を促すために、「児童だけの小空間」を自ら制作し、そこで遊ぶ行為が重要である。よって、二者を融合する事で、造形遊びの新たな側面と成り得る事が考えられる。よって、本研究は、「小空間」を協同的に児童自ら制作できる道具を制作し、造形遊びとしての小空間制作が、「遊び性」「コミュニケーション性」「目標到達性」の評価を得られるか検証する事で、小空間と造形遊びの融合可能性を明らかにする事を目的とする。

本研究ではまず、造形遊びとしての小空間を道具化するため、小空間と造形遊びを定義した上で、その特徴から造形遊びとしての小空間の設計条件を設定した。次に、小学校4年生の児童を対象とし、実際に小空間制作体験実験を実施した。制作体験を通じて、制作・使用・片付けの各段階において、児童の言行とシーンの分析・分類から、小空間制作の「遊び性」「コミュニケーション性」「目標到達性」の評価を検証した。また、ワークショップの際、協同制作を行う対象が様々にある事から、児童を取り巻く環境状況を加味し、本実験では、親子ワークショップ、児童ワークショップ、多人数児童ワークショップの3パターンを実施し、実験全体を通して、各環境要因による他の影響を差し引きし、小空間制作体験が児童に及ぼした、効果を明らかにした。

以上の小空間制作実験を通じて、造形遊びとしての小空間の「遊び性」「コミュニケーション性」「目標到達性」の検証を行う事ができ、小空間と造形遊びの融合可能性を実証した。また、小空間制作特有の項目を導き出す事ができ、造形遊びとしての小空間制作の利用可能性を考察することができた。今後、造形遊びとしての小空間制作の可能性を開くものとして、研究の一助となりえるといえる。

キーワード

1：小空間 2：造形遊び 3：制作体験 4：児童 5：心理的効果

慶応義塾大学大学院 政策・メディア研究科
澁谷 年子